



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

四旬節第 2 主日 B 年 (2024 年 2 月 25 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：創世記 22 章 1—2、9a、10—13、15—18 節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 8 章 31b—34 節

福音朗読：マルコによる福音書 9 章 2—10 節

おそ 畏れる

三つの朗読から

第一朗読にある「あなたは、自分のひとり子である息子すら、わたしにささげることが惜しかなかった」(12 節) という天使(御使い)の言葉にハッとさせられます。アブラハムは大切な息子イサクをささげようとして、年を取ってやっと手にした大切な息子を「焼き尽くす献げ物としてささげなさい」(2 節) という神さまの言葉に従おうとします。ためらいは? 疑いは? 理不尽にも思える神さまからの命令に忠実であろうとするのは、アブラハムが「神を畏れる者」(12 節) だからです。

第二朗読の「その御子さえ惜みせず死に渡された方」(32 節) とは父なる神さまです。アブラハムがためらいと疑いの中で「息子を屠ろうとした」(創 22 章 10 節) のと同じように、父なる神さまも苦しみの中でご自分の御ひとり子であるイエスさまを十字架上でささげてくださいましたのです。そこに、全被造物に対する父なる神さまの共感と愛があるように思います。人間を愛するが故に大切なものをささげつくしていく神さまの姿です。

福音にある「目の前で変わり」(2 節) は直訳すると「変えられた」となります。イエスさまを変えてくださったのは父なる神さまです。変えてくださった父なる神さまに信頼して、イエスさまは十字架への道へと歩みます。なぜなら、イエスさまには「これはわたしの愛する子」(7 節) という天からの声がいっつもこの中で響いていたからです。

説教 畏れる

四旬節第二主日では、必ず主のご変容の箇所が朗読されます。受難に先だって、イエスさまはご自分がどなたであるのかを、そしてご自分の本当のお姿をお弟子さんたちに教えてくださいました。それは、十字架に直面してお弟子さんたちが迷い、戸惑ってしまわないようにとの配慮だったと思います。

しかし、ご変容の場面でのイエスさまの真のお姿の本当の意味が分かるようになるのは、お弟子さんたちが復活したイエスさまに出会った後でした。

日本語で「^{おそ}恐れる」と「^{おそ}畏れる」は同じ発音ですが、^{きょうふ}恐怖に^か駆られるという「^{おそ}恐れる」と、自分を^こ超えた何者かに^{そんけい}尊敬を表す「^{あらわ}畏れる」では意味が違います。「^{おそ}畏れる」は「^{ちが}おそれいる」という表現を生んでいったのかもしれませんが、「^{けいふく}敬服する」の意味合いがあります。生き方、あり方への^{しょうさん}賞賛としての「^{おそ}畏れる」です。ここから「^{いふ}畏怖」という表現が生まれたのでしょうか。

ヘブライ語で「^{おそ}畏れる」は「^{してき}正しく生きる」、「^{おそ}礼拝する」意味があると^し両宮師は^し指摘しています。アブラハムは、神さまの道を「^{してき}正しく生き」、神さまを「^{おそ}礼拝して」生きる人でした。その点で「^{おそ}神を畏れる者」(創 22 章 12 節)でした。「^{おそ}彼を焼き尽くす^{おそ}献げ物としてささげなさい」(創 22 章 1 節)という命令は、理不尽にも思えますが、神さまの道を「^{してき}正しく生き」、神さまを「^{おそ}礼拝して」生きるためにアブラハムは、神の言葉に忠実であろうとします。それは、^し信仰のう^しえでの^し試練であったことでしょう。

第二朗読でも「^{おそ}畏れる」のテーマが展開しているようです。パウロは、前置詞+わたしたちという形で「^{おそ}わたしたちのために」を^く繰り返します(ロマ 8 章 31b、32、34 節)。神さまが「^{おそ}わたしたちのために」何かをしてくださったという事実。しかも、それがご自分の^{おそ}独り子であるイエスさまを「^{おそ}惜しまずに死に^{おそ}渡された」という十字架の事実は、神さまへの^い畏敬の^い念を^お起こさせます。

「^{おそ}畏れる」とは、神さまがなされた^い偉大な出来事への人間の側からの^お敬服や^お賞賛だけでは^お済まないものがあります。なぜなら、わたしたちのために十字架上で死んで、「^{おそ}復活させられた方であるキリスト・イエスが……わたしたちのために^お執り成して^おくださる」(ロマ 8 章 34 節)からです。つまり、「^{おそ}神を畏れる」からは、神さまとの^おパーソナルな(人格的な) ^お関わり合い、^お関係があるのです。最初に神さまが何かをしてくださった、その^お応対として人間は自分自身のすべてを^おかけて「^{おそ}畏れる」。ですから、「^{おそ}畏れる」は、人間のこころのありようだけではなく、^お生き方全体に関わるものなのです。

福音の中で「この世のどんな^おさらし職人の^お腕も及ばぬほど白くなった」(マコ 9 章 3 節) イエスさまのお姿に^お接して、お弟子さんたちは^お怖くなって「^{おそ}恐れます」(マコ 9 章 6 節参照)。しかし、「^{おそ}恐れ」が、「^{おそ}畏れ」へと変わっていくのは、復活なされたイエスさまと出会った後です。こうして、お弟子さんたちはイエスさまと同じように「^お愛する子」(マコ 9 章 6 節)となっていくのです。そのためには、アブラハムと同じように理不尽な体験であるイエスさまのお苦しみと十字架を^お目の^おあたりにしなければなりません。アブラハムが^お体験した^お信仰の^お試みを、お弟子さんたちもまた同じように^お体験する必要があったのでしょうか。わたしたちも、人生の中で理不尽な^お体験を^お重ねていきます。試練として^おそれを受けとめた時、「^{おそ}神を畏れる者」へと^お変えさせてもらえるのでしょうか。

3月17日、9時半のミサ後、「運営協議会」があります。みなさん参加してください。

その日は8時半のミサはありません。